

週日の説教

金 大烈 神父 2009年11月5日(木)

《聖書は、全ての登場人物の気持ちになって読みましょう》

今日の福音(ルカ 15・1-10)もよく読まれている物語だと思います。

さあ、今日は聖書について勉強をしたいと思います。

皆様、この福音のような物語を読むとき、どのような視点から見るでしょうか。まず内容を把握しようとするでしょう。99匹の羊を残し、見失った1匹を探しに出かける飼い主は神様であること。悔い改めの必要ない99人が何かすることより、1人の罪人が回心することをもっと喜ばれるのが神様の御心であること。このような把握の仕方を読まれると思います。しかし、もっと深く黙想する方法を申し上げます。

私たちが聖書を読む時、イエス様が登場する物語ならば、やはりまずイエス様の振る舞いや、み言葉に関心を持ちますね。しかしそれだけでなく、次には、その中に登場する全ての人々の立場になってみてください。イエス様に話しかけられる人、癒される人、イエス様に何かを頼む人、そういう全ての登場人物の気持ちにならなければもっと深い意味で聖書を理解することは難しいです。

たとえば、残された99匹の羊の気持ちになってみてください。腹が立ちますよね。「主人は出かけたのだろうか。今頃あの憎らしい奴を探しているのだろうか。どこまで行ったのだろうか。なぜ自分勝手に出て行った奴を探すために私たちを残して行ったのだろうか。」このような99匹の羊の気持ちにもならなければ、その物語の全体的な内容を把握するのは無理です。また、逆に、逃げた1匹の羊になって考えてみましょう。きっと怖かったですよね。「何とか逃げて来たけれど、今はよい状態なのだろうか。間違えた道を選んだのではないか。」と思い悩んでいるでしょう。そして羊飼いに会えたとき、どのような気持ちになったでしょうか。「探しに来てくれた。」という喜びと、「ああ本当に申し訳なかった。」という気持ちにもなったでしょう。また、もし自分が99匹の群れに戻ったら、99匹は自分をどのような目で見ると、気にもなるでしょう。

このような視点で全てを見なければ、『木を見て森を見ない』というたとえのとおり、間違いを起こす可能性があることを意識してください。

今日の物語は、とても面白い話です。1匹の羊の目で考えてみたらどうでしょうか。99匹の立場ならばどうなるでしょう。99匹を残して出かせなければならぬ羊飼いの心になってみるとどうでしょう。1匹を見つけて喜ぶ飼い主の立場にもなってみましょう。このように、私達が全てで読み取れば、私たちは心が広くなると思います。すぐに人を指差さなくなると思います。

聖書を読むときは、自分の立場で読むくせがあると思います。自分にぴったりの話だと思うでしょうが、実は全ての人にぴったりなのです。全ての登場人物の立場になって考えるのが聖書の正しい読み方なのです。

さあ、今日の福音に入ってみましょう。今日の福音のテーマは、『まことの悔い改め』です。『まことの悔い改め』のためには、自己中心的になってはいけません。自己中心的な心で悔い改めをしても、完璧な悔い改めはできません。本当の悔い改めは、神様が中心でなくてはできないのです。怖さから赦しの秘跡を求めたのでは、また同じことをしてしまいます。罪の考え方の基準を神様に置き、神様の心をどれだけ痛めたか考えれば本当の悔い改めができるでしょう。

今日の福音で、なぜ他の人ではなくて、イエス様に徴税人や罪人が近づいて来たのでしょうか。こ

のような人々は、犯した罪が重く、解放されたいと思っていました。イエス様の話を聞けば解答が得られるのではないか、と希望を持っていました。だから、イエス様に近づいたのです。

もし皆様も心に難しい問題を抱えているならば、イエス様に近づいてください。それが一番賢明な方法です。私たちは死ぬときまで、悔い改める必要があります。理由は神様の愛のためです。そうでなければ何の意味もありません。

一匹の羊を見つけて、叱る気持ちは全然なく、ただ喜ぶ気持ち。無くしたドラクメ銀貨を見つけて、嬉しくて、嬉しくて、近所の人と一緒に喜ぶ気持ち。それを思えば、神様のみ心が分かると思います。罪を犯したことをあれこれ注意するのではなくて、罪を犯したことを後悔する心を何よりも喜ぶのが神様の御心なのです。

罪がない、と思うのは一番大きな罪であることを意識しましょう。

ありがとうございました。